



「海外移住の日」記念 特別上映会

中南米へ渡った若者たち

— 日系社会青年海外協力隊の源流をたどる —

開催日：2026年6月21日（日）

1908年6月18日の笠戸丸サントス港到着にちなむ「海外移住の日」にあわせ、戦後に中南米へ渡った若者たちの歩みを2本の映像で振り返ります。海外移住研修生と海外開発青年の挑戦、そして現在へとつながる協力の原点にふれる上映会です。

上映作品



1 「ザ・チャレンジャー 海外移住研修生」
ブラジルやパラグアイなどで農業に挑んだ海外移住研修生の記録。



2 「燃えよ若い力 海外開発青年」
農業・医療・教育・技術などの分野で中南米の日系社会と地域社会に携わった若者たちの記録。



会場

JICA横浜センター
4階 かもめ

※詳細地図は裏面をご覧ください。



時間

14:00～15:10
(開場 13:30)



定員

60名



申込不要

当日先着順

1階で受付後、案内に従って
4階会場までお進みください。

『ザ・チャレンジャー 海外移住研修生』

(制作年：1988年／30分)

ブラジルのセラードやアマゾン地域、パラグアイ、アルゼンチンの農業地域など、厳しい自然環境の中で農業に取り組んだ**海外移住研修生**たちの歩みを描きます。

開発が困難とされた土地で、現地の人々と協力しながら、大豆、コーヒー、花卉栽培などに挑戦した青年たち。日本で培った技術や経験を生かしながら、現地に根を張り、日系農業の発展に関わっていった若者たちの姿を紹介します。

海外移住研修生とは

海外移住研修生は、中南米の移住地で活躍する農業の中堅指導者を育成するため、昭和35年（1960年）に発足した制度です。主に18歳から30歳までの農業移住を希望する青年男子を対象とし、日本国内で約1年間、農業実習、語学、現地事情などの研修を行いました。

34年間にわたり、約1,100名の青年を中南米各地の移住地へ送り出し、平成6年（1994年）にその役割を終えて終了しました。



▲海外移住研修所（群馬県赤城山）

1986年2月、海外開発青年の第1回生が日本を出発しました。

2026年は、派遣開始から40周年の節目にあたります。かつて発行されていた広報誌『海外移住』の記事から海外開発青年の歴史を振り返るパネルを会場内に展示する予定です。

JICA横浜センター
神奈川県横浜市中区新港2-3-1

【アクセス】

みなとみらい線：「馬車道」駅（4番出口）から徒歩約8分、「みなとみらい」駅（クイーンズスクエア方面改札）より徒歩約15分

JR/市営地下鉄：「桜木町」駅から汽車道、ワールドポーターズ、新港サークルウォークを通り徒歩約15分、「関内」駅から馬車道経由で徒歩約15分

『燃えよ若い力 - 海外開発青年』

(制作年：1987年／30分)

海外開発青年として中南米へ渡った若者たちの記録です。農業に限らず、日本語教育、土木、医療、コンピューターなど、各分野の専門知識を持つ青年たちが、ブラジル、ボリビア、アルゼンチンなどで活動しました。

言葉や生活環境の違いに向き合いながら、現地の人々とともに活動する若者たちの姿を紹介します。現在の日系社会青年海外協力隊へとつながる、若者たちの挑戦と交流の軌跡をたどります。

海外開発青年とは

海外開発青年は、中南米の日系社会の活性化と移住促進を目的として、昭和60年度（1985年度）に発足した制度です。専門的な技術を持つ20歳から35歳までの日本の青年が、3年間、現地の農協や日本語学校などで活動し、日系社会や地域社会の発展に関わりました。

この3年間は、将来の定住を考えるための「体験移住」と位置づけられ、渡航費や現地生活費などの支援を受けながら活動しました。

その後、事業の目的は移住促進（体験移住）から日系社会支援（ボランティア制度）へと移り、1996年には「日系社会青年ボランティア」へと改編されました。現在の日系社会青年海外協力隊へとつながる制度の一つです。



利用案内・交通案内



JICA横浜 海外移住資料館

045-663-3257



jomm02@jadesas.or.jp

